

こどもらを引 きつける教育

須長茂夫著

『どぶ川学級』

こどもが非行化しても入試に落ちても「教育が悪い」と人はいらう。では教育とは何か。これから必要なほんとうの人間としての教育を考えながら読む。

『どぶ川学級』は、「ドレイ工場」——で有名な全金日本ロール争議の落とし子である。まだ若い須長先生（生産労働者）はロールの子弟の教育を追求する。自民党政府のもとで、「期待される人間像」「神話教育」「学力テスト」の中で、子弟たちが直面する事実をどう受けとめるか。いくらがんばっても須長個人の力には限界がある。この努力に周囲の人びとの好意と協力がこたえる。この子弟に加えられる攻撃は、「合理化」下の職場での攻撃とまったく同じ

質のものである。須長先生と周囲の人びとの意志の統一があったからこそこの須長方式もうまれたのだろう。

どぶ川学級では二時間びっしり授業のこともあるが、大いに遊びもする。「七並べ」から「おいちよかぶ」、「バチン」のうまいやり

読者の書評

方までも。

どぶ川学級のことを学校に知れると家の人から「行くでない」ととめられるが、こどもたちはソロバンを持ち塾へ行くふりをして集まる。そんなにもひきつけるどぶ川学級にどんな設備があるか。何もない。だが現在の「指導要領」

にはない「人間扱い」がある。こどもたちは、試験のことしか考えない学校にはあきあきしている。クラス委員は「頭のいいやつ」しかなれないと信じこんでいる。純真なこどもを傷つける教育、これはみんなの問題である。

はっきりしていることは教育は権力に利用されてならないということだ。りっぱな校舎があっても、汚れた教育であってはならない、このごくあたりまえの理屈を犯してはならないと強く感じた。
(すだ みゆき・勤労学生、二十一歳)

(労働旬報社 三百九十円)

この欄への投稿を歓迎します。どんな本の書評でもけっこうです。新刊書に限ります。四百字づつ二枚以内。掲載にあたって内容を要約することがあります。りはとくにありません。所、年齢、職業を明記。て先は東京都渋谷区二六の七、郵便局文化部